

JAPAN JOURNAL OF GOLF EDUCATION

ゴルフ教育研究

Vol.8 No.1

CONTENTS

《報告》

大学体育におけるターゲット・バードゴルフの実践研究

石村 広明 1

【投稿規定】

. i ~ v

大学ゴルフ授業研究会

Volume8, Number1 February 2024

【報告】

大学体育におけるターゲット・バードゴルフの実践研究

石村広明(東京都立産業技術高等専門学校)

Practical Study of Target Bird Golf in University Physical Education

Ishimura Hiroaki (Tokyo Metropolitan College of Industrial Technology)

1

概要

本報告は大学ゴルフ授業における TBG (ターゲット・バードゴルフ) の有用性を検証することを目的とした。2022 年春学期に A 大学で開講された健康・スポーツ科学演習 (ゴルフ) を履修した大学生 14 名 (男性 11 名、女性 3 名) を本調査の対象とした。①打球練習場を活用した練習による TBG のスコアの変化と打球データ (ヘッドスピード、ボールスピード、飛距離、ミート率、以下 HS、BS、D、M) の関係や、②自由記述アンケートより TBG の実践を通じた自覚的な学習効果について検討した。TBG の pre スコアと post スコアに有意差が認められた ($P(T<-t)$ 両側 0.05)。スコアと打球データの相関については、HS、BS、D の3項目において負の相関がみられた。また、自由記述アンケートから TBG の実践を通して、自己の成長やコースマネジメントの気づきが自覚することが明らかとなった。それらが生涯スポーツとしてゴルフを継続することへのきっかけとなる可能性が示唆されたことから、体育授業において TBG を実践することはゴルフの技能習得や生涯スポーツ実践に繋がる可能性のある有効な手段の一つであることが考えられた。

キーワード: 大学体育、ゴルフ授業、ターゲット・バードゴルフ、教材

1. 緒言

ゴルフは生涯スポーツとして人気があり、笹川スポーツ財団の「スポーツライフ・データ 2018」では、10 代から 70 代までのすべてのカテゴリーでスポーツを行う場所に

「ゴルフ場 (練習場を含む)」が選択されており、幅広い年代でゴルフが実践されていることが示されている。大学ゴルフ授業研究会の 2014 年の調査によると、全国で約 580 大学において体育授業としてゴルフが

行われている。大学でのゴルフの履修の有無が在学時および卒業後のゴルフ実施に影響を与えており(小林ら:2021)、授業の内容についてもおおむね肯定的に受け止められていると報告されている(伊藤:2001, 大澤:1991)。ゴルフの授業は開講されているが、実態としてコースでのラウンドを経験するところまでは到達していないことが課題として挙げられる。三幣ら(2010)の全国のゴルフ授業を実施している120大学を対象に行われた調査では、授業の場所としてショートコースを含むゴルフ場を利用している大学は約30%にとどまっている。そのため、大学のゴルフ授業の到達目標は主にルール理解とスイング作りに設定される傾向があるといえる(高橋ほか:2015)。

体育授業での経験を生涯スポーツに繋げるためにも練習で培ったスキルを実践する場としてのコースでの実技は必要であるといえる。三幣ら(2010)の調査でもゴルフ授業実施に際しての問題点として、場所がないことや費用の問題が挙げられていた一方で、受講生がラウンドを伴う授業を希望しているという実態も明らかとなっている。石原(2017)の行った研究においても、ゴルフ初心者はショートコースの活用を求めていることが報告されている。そこで有効だと考えられる手段としてターゲット・バードゴルフ(以下、TBG)が挙げられる。

TBGはゴルフボールにバドミントンの羽根を付けた専用ボールを、ゴルフクラブ(ウェッジ)で打ち、傘をさかさまに立てた形の直径110cmのホールへ入れる日本発祥のスポーツである。長澤(2004)も「比較的安全で、手軽に実践でき、数値で個人の技量が把握でき、運動の正確性が必要で、結果もセ

ルフジャッジが容易、結果を予測する洞察力それに伴う戦術が求められる。また、偶然によって成績が左右される可能性が低く、自己決定の場面が存在する」と、その教育的価値を示している。TBGは学内のグラウンドや体育館といった限られたスペース、かつ既存の施設を活用して実践的なゴルフを行うことができるスポーツであるといえる。

2. 目的と方法

本報告の目的は、ゴルフ授業におけるTBGの有用性を検証することである。なお、ここでいう有用性とはゴルフ技術の獲得および評価、ルール理解、生涯スポーツ実践に貢献できることとする。そこで、①打球練習場を活用した練習によるTBGのスコアの変化と打球データの関係、②TBGの実践を通じた自覚的な学習効果について報告する。①については、第3回(pre)と第11,12回(post)のスコアを比較しつつ、第4~10回に提出させた打球データとの関連性について報告する。また、②については、授業終了後の自由記述アンケートの結果を基に報告する。なお、postは原則第11回のスコアを採用し、欠席者のみ第12回のスコアを採用した。

調査対象としたのは2022年春学期にA大学で開講された健康・スポーツ科学演習(ゴルフ)を履修した大学生、男性11名、女性3名の合計14名である。対象者の性別やゴルフ経験については表1に示す。授業全体の流れは表2に示す通りである。なお、第2,13,14回は本研究と関係性のない体力測定および質問紙調査を実施した内容であったため割愛した。対象者は週に1回のゴルフ授業において打球練習場で約90分間の打球練習を行った。打球場は写真1のよう

に屋外にあり、打球練習場に設置されている人工芝マットとレンジボールを使用した。授業時間内の練習内容については『一般社団法人関西ゴルフ連盟の入門ガイドブック』を参考にした。また、対象者からの個別の質問等については授業担当の教員が指導を行った。打球データの測定には株式会社ユピテルのATLAS GOLF SWING TRAINER GST-5 Wを用いて、ヘッドスピード (s/m)、ボールスピード (s/m)、飛距離 (yd)、ミート率を測定した。各授業の終了時に3球分のピッチングウェッジによるショットの打球データ(ヘッドスピード、ボールスピード、飛距離、ミート率、以下HS、BS、D、M)をGoogleフォームを用いて提出させた。なお、ピッチングウェッジに限定させた理由は、TBGを行う際に使用するクラブはウェッジ1本のみであるため、そこを想定したからである。

授業で実践したTBGのコースレイアウトは表3に示した通りで、par2が1H、par3が2H、par4が2Hの合計par16とした。各コースの距離はTBG競技規則の公認仮設コースを参考に設定し、全ホールでOBは設けていない。写真2のように、各ホールには半径1.5mのセカンドホール^{注1}を設け、ショットがそこに入れば1打を付与し、ホールアウトとした。第3Hには幅5yのウォーターハザードを設置し、そこにボールが入ると1打を付与し、ウォーターハザードの手前からプレーさせた。また、第5Hには高さ2m幅3mほどの防球ネットを設置し、ネットを越すのか、迂回するのか、コースマネジメントを考えられるようにした。

表 1. 対象者一覧

	性別	ゴルフの経験
A	男性	打球場経験あり
B	男性	打球場経験あり
C	男性	打球場経験あり
D	男性	打球場経験あり
E	男性	打球場経験あり
F	女性	打球場経験あり
G	男性	未経験
H	男性	打球場経験あり
I	男性	打球場経験あり
J	男性	未経験
K	男性	打球場経験あり
L	男性	打球場経験あり
M	女性	未経験
N	女性	未経験

表 2. 授業の流れ

第1回	第3回	第4~10回	第11, 12回	第15回
オリエンテーション	TBG①	打球練習	TBG②, ③	まとめ

表 3. TBGの各ホールの情報

	1H	2H	3H	4H	5H
Par	3	2	4	3	4
距離	30yd	15yd	50yd	35yd	40yd



写真 1. 打球場での練習風景



写真 2. TBG 実践の様子

3. 結果

まず、①の打球練習場を活用した練習による TBG のスコアの変化と打球データの関係について結果をまとめる。対象者の TBG のスコアの比較を表 4 に示す。pre のスコアの平均が 29.5 打、標準偏差 10.5 打であり、post のスコアの平均が 24.6 打、標準偏差が 4.4 打であった。この結果を対応のある t 検定による統計処理を行ったところ有意差が認められた ($P(T<-t)$ 両側 0.05)。

表 4. TBG のスコア

	TBG (pre)	TBG (post)
平均	29.5	24.6
SD	10.5	4.4

次に、打球練習場での練習前後の打球データ (pre, post) をそれぞれ表 5、表 6 に示す。pre の平均が HS:27.9m/s、BS:30.0m/s、D:81.2y、M:1.1、標準偏差がそれぞれ、10.3m/s、14.2m/s、41.6y、0.3 であった。post の平均は 28.8m/s、32.8m/s、87.4y、1.1、標準偏差が 7.3m/s、7.5m/s、23.9y、0.1 であった。なお、pre 打球データは第 4 回の授業で測定したものを post 打球データは第 10 回の授業で測定したものを採用

した。それぞれの打球データについて、対応のある t 検定を行ったが、すべての項目で有意差は認められなかった ($p>0.05$)。

表 5. 打球データ (pre)

	HS (m/s)	BS (m/s)	D (y)	M
平均	27.9	30.0	81.2	1.1
SD	10.3	14.2	41.6	0.3

表 6. 打球データ (post)

	HS (m/s)	BS (m/s)	D (y)	M
平均	28.8	32.8	87.4	1.1
SD	7.3	7.5	23.9	0.1

そして、TBG のスコアと各打球データの関係性についてピアソンの積率相関係数を求めた。なお、相関の解釈は、Hopkins らの方法と同様に小さい ($0.1 \leq |r| \leq 0.29$)、中程度 ($0.3 \leq |r| \leq 0.49$)、大きい ($0.5 \leq |r| \leq 0.69$)、非常に大きい ($0.7 \leq |r| \leq 0.89$)、ほぼ完全 ($0.9 \leq |r| \leq 0.99$)、完全 ($|r| = 1.0$) とした。その結果、スコアと HS には-0.61、スコアと BS には-0.46、そして、スコアと D には-0.47 の負の相関がみられた。

①のまとめとして、授業内で実施した TBG のスコアは統計的にも有意に改善されたことが示された。また、打球練習場に提出させた打球データについては、全体の平均値としては向上したが、そこに統計的な差は確認できなかった。TBG のスコアと打球データの関係性については、HS、BS、D の 3 項目においてスコアとの間に負の相関が確認できた。以上のことから、TBG のスコアによってスイングの習熟が評価できることが確認できた。

次に②TBG の実践を通じた自覚的な学習効果について、授業終了後に実施した自由記述アンケート回答の解釈的内容分析を行った。自由記述アンケートについては、TBG の活動を通じた感想や自身の成長や学びについて記述を求めた。記述内容は「スキルに関する記述」、「コースマネジメントに関する記述」、そして、「生涯スポーツ実践に関する記述」に分類することができた。

スキルに関する記述では、飛距離の向上や調整力、方向性の安定についての記述が多くみられた。コースマネジメントに関する記述では、傘に入れるために適した距離を残す(レイアップ)ことや、風を考慮したショットなどの記述があった。そして、生涯スポーツ実践に関する記述では、「またやってみたい(対象者B、I、J)」や「この授業を受講し終わってもゴルフ練習場に行こうと思えた(対象者F)」、「もっとゴルフを練習してコースを回れるように、練習していきたい(対象者H)」といった記述が確認できた。

4. 考察

ゴルフにおける飛距離を決定する3要素として、ボールスピード、スピン量、打ち出し角が挙げられる。そして、そのボールスピードを決定する要因にクラブヘッドスピードとミート率があり、クラブヘッドスピードはボールスピードと大きな相関があることがわかっている(下野ら:2016)。また、鈴木・北(2020)の研究では、クラブヘッドスピード・クラブフェース向きの誤差・クラブフェースの一貫性の総合的な成績と仮設コースのスコアランクに有意な相関があることが示されている。このようにスイング

要素は実際のゴルフだけではなく仮設コースのスコアとも関連があることから、打球データの改善がTBGのスコアアップに繋がったと考えられる。また、自由記述アンケートの結果のスキルに関する記述において「空振りが減った」ことが確認できたことや、マネジメントに関する記述において「残り距離を意識する」ようにコースマネジメントをできるようになったことがスコアアップに繋がったと考えられる。

自覚的な学習効果についてはTBGを用いた実践研究は管見の限りないが、米川ら(2014)が中学校において行ったスナッグゴルフ^{注2}の実践では、授業を通して技能の獲得や楽しさの享受がみられたことが報告されている。益子(2003)の調査では、コースでのラウンドを経験した大学生の86%がゴルフを将来の趣味にしたいと回答している。このことから、練習だけでなくTBGで模擬ラウンドを経験できたことが生涯スポーツ実践につながる要素として影響を与える可能性が示唆された。

5. まとめ

本報告では、ゴルフ授業におけるTBGの有用性を検証するために、大学体育授業においてTBGの実践および、打球練習場におけるレンジボールによる練習と打球データの測定を継続的に実施した。その結果、TBGの平均スコアが良くなり、スコアとHS、BS、そして、Dとの間に負の相関が認められた。このことから、ゴルフの技能の高まりをTBGのスコアを用いて評価することができると考えられる。

また、自由記述の内容からTBGの実践を通して、自己の成長やコースマネジメント

の気づきを自覚することが明らかとなり、それらが生涯スポーツとしてゴルフを継続することへのきっかけとなる可能性が示唆された。これらのことから、体育授業においてTBGを実践することはゴルフの技能習得や生涯スポーツ実践に繋がる可能性のある有効な手段の一つである可能性が考えられた。

【注釈】

1. 公式ルールでは樹脂製で直径約86cmのフープ(輪)を地面に置くが、初心者の多い体育授業での実施のため拡大し、ラインカーで白線を引くことで代用した。

2. アメリカ発祥の初心者に向けたスポーツ。Starting New At Golfの頭文字をとってスナッグゴルフと呼ばれている。

【文献】

石原端子, 2017, スキルの獲得を目指すゴルフ初心者が求めるフィードバックとそのタイミング, 『沖縄大学人文学部紀要』, 第19号, 55-65

一般社団法人関西ゴルフ連盟, これからゴルフを始める人の“必修”“必携”解りやすい入門ガイドブック

伊藤文雄, 2001, ゴルフ授業に対する学生の評価, 『スポーツ科学・健康科学研究』4, pp. 1-6

大澤啓蔵, 1991, 大学ゴルフ授業履修者の実態調査—ゴルフ経験、履修動機、関心度、授業の感想—, 『亜細亜大学教養学部紀

要』, 43, pp. 262-279

小林勝法・北徹朗, 2021, 学生時代および卒業後のゴルフ経験とゴルフへの意識に関する研究—1970~2014年に国内の大学を卒業した1800人に対する全国調査より—, 『ゴルフ教育研究』Vol. 6, No. 2, pp2-9

下野智史・児玉斎・鈴木克幸, 2016, プレイヤーのスイング特性に応じたゴルフシャフトの最適設計, 『日本機械学会論文集』

鈴木タケル・北徹朗, 2020, 大学ゴルフ授業におけるスイング技術客観評価方法の検討, 『ゴルフ教育研究』Vol. 6 No. 1, pp2-13

高橋宗良・北徹朗・浅井泰詞・橋口剛夫, 2015, 大学ゴルフ授業の到達目標—中国地方の大学シラバスによる検討—, 『ゴルフ教育研究』Vol. 1, No. 1, pp2-8

長澤光雄, 2004, ターゲット型球技の教育的価値に関する一考察, 『日本体育学会大会号』55巻, 627

Hopkins W., Marshall S., Batterham A., Hanin J. Progressive statistics for studies in sports medicine and exercise science. Med. Sci. Sports Exerc. 2009;41:3-12.

益子詔次, 2003, 生涯スポーツをめざした大学体育としてのゴルフ授業, 『宇都宮大学教育学部教育実践総合センター紀要』, 第26号, pp51-57

三幣晴三・光永吉輝・竹田幸夫, 2010, 日本における大学ゴルフ授業の実施内容に関する調査研究, 『駒大大学総合教育研究紀要』, 4, pp. 445-464

米川直樹・鶴原清志・坪田暢允・小山哲・吉村篤司・吉里秀雄・坂田利弘, 2014, 中学校体育授業でのスナッグゴルフ実施による生徒の反応について, 『三重大学教育学部附属教育実践総合センター紀要』, 第34号, pp. 83-88

【URL】

笹川スポーツ財団 スポーツライフ・データ 2018

https://www.ssf.or.jp/thinktank/sports_life/datalist/2018/ (アクセス日: 2021.4.13)

笹川スポーツ財団 ターゲット・バードゴルフの歴史・沿革

https://www.ssf.or.jp/ssf_eyes/dictionary/targetbirdgolf.html (アクセス日: 2022.2.16)

大学ゴルフ教育研究会 HP

<https://daigaku-golf.org/about> (アクセス日: 2022.2.16)

ターゲット・バードゴルフ競技規則

<http://www.setoohashi.com/themes/main/images/sport/kyougikisoku.pdf> (アクセス日: 2022.2.14)

ゴルフ教育研究【投稿規程】

1. 雑誌の性格

ゴルフ教育研究は、ゴルフを通じた教育研究に関するオープンアクセスジャーナルである。ゴルフ教育に関する新しい知見および教育方法を日本語または英語で公表する。

2. 投稿資格

ゴルフ教育研究は、一般社団法人大学ゴルフ授業研究会が管理・編集を行う研究論文誌であるが、本研究会の世話人（会員）と非世話人（非会員）を問わず、本誌に原稿を投稿することができる。ただし、非世話人（非会員）は、原稿の採択が決定した場合に、別に定める掲載料を大学ゴルフ授業研究会研究論文誌編集委員会に支払わなくてはならない。

3. 投稿者の責任

掲載された原稿の内容に関して、投稿者がすべての責任を負うものとする。投稿原稿の内容は未発表のもので、他の学術雑誌に投稿中でないものに限る。

4. 投稿原稿の種類と内容

4.1 種類

投稿を受け付ける原稿は、「論文（Paper）」、「報告（Report paper）」、「授業アイデア提案（Proposal paper in a class）」、「資料（Material）」、「その他（others）」とする。この内、「論文」、「報告」、および「授業アイデア提案」は査読者の評価を参考にし、研究論文誌編集委員会において掲載可否を判断する。「資料」、および「その他」は研究論文誌編集委員会の確認を経て掲載する。従って、「資料」および「その他」は査読制度を設けない。

- 1) 論文（Paper）は、独創的で適正なデータから、十分な検証、論証を経て価値のある結論を提示したものの。
- 2) 報告（Report paper）は、ゴルフ教育の立場からの実践報告、新たな教育方法等の結果をまとめたもの。
- 3) 授業アイデア提案（Proposal paper in a class）は、高等教育機関の授業において、効率的・効果的に教育内容を展開するためのアイデアを提案したもの。また、授業用に独自で開発した教材や教具について紹介したもの。
- 4) 資料（Material）は、本研究会の研修会において、研究発表した概要をフォーマットに則り、まとめたもの。
- 5) その他（others）は、上記4点の原稿種類に該当しないが、ゴルフ教育の観点から有意義な内容が記載されたもの。これは、研究論文誌編集委員会から著者を指定して原稿作成を依頼する場合がある。

4.2 原稿の長さ

本誌はオープンアクセスジャーナルであるため、どの原稿もフォーマットに則り必要事項が記載されていれば文字数や頁の制限は設けない。ただし、図や写真については、過度な使用にならないように配慮すること。

1つの原稿において、研究成果が多岐にわたる場合は、研究論文誌編集委員会の判断により、研究内容を分割し、それぞれ独立した原稿とするか、連載原稿とするように指示する場合がある。

なお、論文 (Paper)、報告 (Report paper)、授業アイデア提案 (Proposal paper in a class) の原稿には、英語タイトル、および英語または日本語のアブストラクトを付すこと。アブストラクトは、日本語で 400 字程度、英語で 150～250 語 (word) 程度とします。また、3～5 語でキーワード (Keywords)、図表もしくは写真を必ず含むものとする。

5. 使用言語と使用単位

5.1 言語

日本語を基本とし、英文で投稿する場合は研究論文誌編集委員会にあらかじめ英文で原稿を作成・投稿する旨を連絡すること。

5.2 単位

SI 単位が望ましいが、CGS 単位も認める。ただし、コース内の距離やボールの飛距離を示す際の単位は「ヤード (yard)」とする。

6. 投稿原稿の提出方法

各種原稿の投稿は、オンライン上で行うものとする。具体的には、大学ゴルフ授業研究会の公式ホームページ (<https://daigaku-golf.org/g-challenge>) より、原稿の種類に合わせたフォーマットをダウンロードし、フォーマットに則り原稿内容を作成、完成原稿を編集委員長宛て (yukkesuki.kenji@gmail.com) に送信すること。

7. 研究論文誌編集委員会での原稿の取り扱い

7.1. 原稿の受付

投稿された原稿は、フォーマットに則していない場合や内容に著しい不備がある場合、研究論文誌編集委員会の判断により再提出を求める。

7.2. 原稿受付日

原稿が研究論文誌編集委員会に到着し、フォーマットに則した原稿であると判断された日をもって受付日とする。

7.3. 審査

1) 査読

「論文」、「報告」、および「授業アイデア提案」の原稿については、査読を行い、査読者の評価を参考にし、研究論文誌編集委員会において掲載可否を判断する。査読は、本誌編集委員会より 2 名の査読者を指定し、査読者は本誌編集委員会に査読評価結果を報告する。査読者 2 名の評価がわかれた場合、3 人目の査読者を指定し、3 名の査読結果を参考に原稿の「採択」、「修正」、「不採択」を決定する。

2) 査読期間

査読期間は、原稿受付日の翌日より 21 日間程度とし、28 日間を越えないものとする（例、原稿受付日：5 月 1 日・査読期間：5 月 2 日～5 月 29 日 23:59）。ただし、3 人目の査読者を指定した場合は、さらに 28 日間の期間が延長される場合がある。

3) 原稿の修正と修正対応表の作成

審査の過程で研究論文誌編集委員会より「修正」を求められた原稿を再提出する際は、査読者への「修正対応表（回答コメント）」を作成する。修正対応表は、原則 Microsoft Word で作成し、校閲機能を活用し、ページ数や行番号などを用い、個々の指摘に対して修正・対応箇所を明示すること。

4) 投稿者の原稿修正期間

審査の過程で研究論文誌編集委員会より「修正」を求められた原稿を再提出するまでの期間は、審査結果「修正」の通知（e メール）を受けた日の翌日から 60 日以内とする（例、審査結果通知日：6 月 15 日・原稿再提出期間：6 月 16 日～8 月 14 日 23:59）。原稿再提出期間内に原稿が提出されない場合、投稿を取り下げたものと判断する。やむを得ない事情により期間内に再提出できない場合は、提出期間の最終日より起算して 8 日前迄（例、原稿再提出期間の最終日：8 月 14 日・申請受付締切日：8 月 7 日迄）に本誌編集委員会に文書にて理由を連絡すること。

5) 「資料（Material）」および「その他（others）」の原稿の審査

「資料」「その他」の投稿原稿は査読を行わない。訂正すべき箇所（例、キーワードが少ない）があった場合は、著者に「訂正」を求める。訂正すべき箇所がなければ、原稿は採択となる。

6) 原稿の訂正期間

「資料」「その他」の投稿原稿に対して「訂正」を求められた場合、「訂正」の通知（e メール）を受けた日の翌日から 10 日以内（例、訂正通知日：9 月 1 日、訂正期間：9 月 2 日～9 月 11 日 23:59）に、訂正した原稿を再提出すること。訂正期間内に再提出されない場合は、原稿の採択を保留する。

7) 原稿分類の変更

研究論文誌編集委員会は原稿審査の結果および過程において、投稿者の希望する投稿分類と異なる種類で再提出の指示、および採択を決定する場合がある。原稿の

種類変更にあたっては、投稿者に了解を求める。

8) 原稿受理日

研究論文誌編集委員会が原稿の採択を決定した日をもって受理日とする。

9) 原稿受理日以降の取り扱い

採択が決定した原稿は、原則的に著者の意思で内容変更や原稿の取り下げを行うことができない。研究論文誌編集委員会は、二重投稿、アイデアやデータの盗用、データの改ざんや捏造などの研究上の不正を発見した場合は、原稿の掲載を取り消すことができる。

7.4. 論文等の掲載日

一般社団法人大学ゴルフ授業研究会の公式ホームページ（<https://daigaku-golf.org/g-challenge>）に、受理された論文等が掲載された日をもって論文等の掲載日とする。

8. 掲載料

筆頭投稿者が一般社団法人大学ゴルフ授業研究会の世話人（会員）である場合は、掲載料は無料となる。筆頭投稿者が非世話人（非会員）である場合は、「論文」、「報告」、および「授業アイデア提案」は一万円（税抜）を、「資料」および「その他」は五千円（税抜）を掲載料として大学ゴルフ授業研究会研究論文誌編集委員会に支払うものとする。ただし、「その他」において、研究論文誌編集委員会の依頼により作成された原稿は、掲載料の負担を求めない。掲載料の請求は、原稿の受理時に筆頭著者に対して通知する。掲載料の納入が必要な場合において、掲載料の支払いがない時は、受理原稿の掲載を保留する。

9. 原稿の校正

校正は、原則として初校に限り著者が行う。校正に際して、著者が訂正できるのは印刷上の誤りや誤字脱字程度であり、それ以外的大幅な修正や新たな加筆、図版の修正は認めない。また、校正の段階で著者名の追加および削除、順番の変更はできない。再校以降の校正は研究論文誌編集委員会で行う。

10. 別刷

採択された論文等の筆頭著者には、別刷のPDFファイルを送付する。印刷された別刷は、本誌では作成しない。

11. 著作権

11.1.

本誌に掲載された論文等の著作権は、一般社団法人大学ゴルフ授業研究会に帰属する。

研究論文誌編集委員会は著者に対して、原稿受理日に「著作権譲渡契約書」の PDF ファイルをメールにて送付する。最終原稿提出時に「著作権譲渡契約書」に記入・捺印したものを PDF ファイル化し、メールにて本誌編集委員会に提出する。

11.2.

著者は原則として、掲載された自分の論文等の全文または、その一部を複製あるいは翻訳・翻案などの形で他の著作物に利用できる。全文複製にて他の著作物に利用する場合、その旨を研究論文誌編集委員会に伝え許諾を得なければならない。それ以外の利用の場合、著者はその著作物の中で本誌に掲載された論文等の利用であることを正しく明記しなければならない。

11.3.

本誌に掲載された論文等の複製あるいは転載の必要性が生じた場合には、研究論文誌編集委員会の判断により、一般社団法人大学ゴルフ授業研究会が著者に代わって許諾することがある。

11.4.

本誌に掲載された論文等の著作物は機関誌の発行以降であれば、一般社団法人大学ゴルフ授業研究会の許諾なしに著者の論文等を著者個人のホームページや SNS 上、もしくは著者の所属する組織のホームページ等に掲載することができる。この場合、論文等の内容は、本誌に掲載された全文が改編されることがなく、かつ原本が本研究会の出版物であることを明示すること。

11.5.

本誌に掲載された論文等の内容が、第三者の著作権を侵害する場合には、その論文等の著者がその責任を負うものとする。

12. 倫理

ヒトを対象とした研究は、ヘルシンキ宣言の趣旨に準拠し、倫理的配慮のもとに実施するものとする。

13. 問い合わせ先

一般財団法人大学ゴルフ授業研究会 機関誌編集委員会

〒180-0023 東京都武蔵野市境南町 1-7-1 日本医科大学スポーツ科学教室

担当：高橋 憲司

メール：yukkesuki.kenji@gmail.com

機関誌等に関わるお問い合わせ等は、上記メールアドレスにご連絡ください。

(大学ゴルフ授業研究会 お問い合わせページ：<https://daigaku-golf.org/contact>)

ゴルフ教育研究ジャーナル「ゴルフ教育研究」

ISSN 2758-6677

第8巻第1号

2024年（令和6年）2月15日 発行

発行者：大学ゴルフ授業研究会

編集事務局：〒180-0023 東京都武蔵野市境南町1-7-1

日本医科大学 スポーツ科学教室（担当：高橋 憲司）

TEL：0422-34-3453

E-mail：yukkesuki.kenji@gmail.com

お問い合わせ等は、メールにてご連絡ください。